

「感じようとして」 山村光春 絵：つき山いくよ

発行日やら印刷所やらが愛想もなく記された、小説の最後のページまで行き着くと、そのたびごとに私はこの世の終わりが来たような、愕然とした心持ちになる。登場人物たちのその後を知る術が、もうどこにもないことに。物語ではあれほどまでに泣いたり笑ったりしているのにもかかわらず、現実の中で感動したり、強く心をゆさぶられるようなことはからっきしなく、生きているという実感は、ゆえに本や映画といった、架空の物語に頼るしかないのだった。

そんな、これまで誰にも言えなかった秘めごとを、なぜか目の前にいる見も知らぬ人に、とうとうと話している。

「でもやで、本からは嗅いだり聴いたり、実際の感覚ってあれへんわけやろ？」

スーツを着た30歳くらいの男の人。上だけふちのある眼鏡をかけていて、その奥にある眠たげな目は、何かを達観しているようにも、はたまた何にも考えていないようにも見える。彼は私が公園で本を読みふけている時、突然話しかけてきた。おそらく芝生にへたり込みへんな顔をしている私のことを具合が悪いとでも思ったのだろう。ただ普通なら初対面の男性に対して怖いとか怪しいとか負の感情が湧き上がりそうなのに、彼には最初からまったくもってなかった。いるだけでなぜかふしぎと安心する。そういう人って確かにいる。

「ん……そうですね。でも実際の感覚かって別にビビビってなるような衝撃的なことなんかないし」「そりゃ自分アレやわ、アレ。感じようとしてへんからやわ」

彼はそう言ったかと思うと、にわかになきなあくびをぼかりとした。「ちょっと寝っ転がらせてもうてもええかな」と、芝生の上にゴロンと横になった。そして30秒もたたないうちにマジ寝顔になった。のび太並みの早さだった。

私はあぐねた。そっと帰ってしまおうか、もしくはこのままここにしようか。ただ、あまりに気持ちよさそうな彼の寝入りっづりをながめていると、私もまねをしたくなってきた。そして隣で同じように寝ころび、目をつむった。

ふしぎなこちだった。

眠いわけではなかったので、意識ははっきりとあった。すると今までちっとも気付かなかった、いろんな音が聴こえてくるようになった。チチチと鳴く鳥のさえずり。サワサワとかすれる葉っぱの音。ほらほらと子どもを呼ぶ親の声。すうすうと立てる彼の寝息も、すぐそばにいるみたいによく聴こえた。それらが四方八方からやさしく奏でられ、和音のような美しい響きになった。そして、ハッとした。彼の言う「感じようとする」こととは、これなのだろうか。私はいよいよおもしろくなり、さらに注意深く耳を澄ませた。

どのくらいそうしていたのだろう。少しばかり眠っていたのだろうか、それすらも分からないようなゆめうつつの状態がしばらく続いた。

やがて意識がいくぶんはっきりし、目を開けようとしたものの、思わずためらった。彼はもう、帰ってしまったのだろうか。寝息はすでに聞こえない。はっきりするのが怖かった。会ったばかりなのに、もう会えないと思うと、なぜかとても切ない気持ちがこみあげてきた。私は目をつぶったまま顔をくしゃっとさせて泣いた。

その瞬間「フッ」というかすかな笑い声が耳をかすめた。

やまむらみつはる

1970年生まれ。BOOK LUCK主宰。ペーパーメディアの企画・編集・執筆に携わる。将来の夢は、喫茶店と短編小説で人の心をほっとさせること。著書に『眺めのいいカフェ』（アスペクト）、『take away souvenir』（www.park editing.com/bookcoverbook）他多数。

つきやまいくよ

絵画を中心に、歌とポエムのパフォーマンスなどでも活動中。2007年1月、大阪・中崎にある「iTohen」（<http://www.skky.info>）にて2人展を開催。Theatre Zooiiiよりバラバラ漫画「KURAKU」発売中。山村光春氏編集による本が初冬に発売予定。